「山王団地湖山池ビオトープの会の変遷と今」

山王団地湖山池ビオトープの会　会長　小川　博文

この会は平成15年に「湖山池の再生を考える会」として発足した。平成12年5月に湖山池東岸公園（お花畑ゾーン）が開園され、公園北詰めに流入する大井手川河口にミニ親水公園的な迂回水路と中州が設置された。この施設は上流からのゴミ、ヘドロ、汚泥、北西からの風による集積ゴミにより徐々に河口全域が浅くなり始め、これに呼応してヨシ、ガマ、スゲ、被覆型の水生植物の繁茂が見られ河口一帯が荒廃し始めた。河口にかかる橋の両側には駐車場と公衆トイレがあり景観上からも見逃しがたく、改善策を探るため各方面からの意見、知恵を集約して町内会有志10人余により立ち上げた。

平成16年初頭からモデル的なビオトープの造成に向けて行政への陳情、水質浄化に向けた町内会（180戸）アンケートの実施、春以降は漂流物の除去活動、湖畔に繁茂するクズ、巨大雑草群の草刈り、清掃、コスモスの植栽などに尽力した。ついで17年冬の寒中、迂回水路にビオトープ池と中州の整備に着工、重機作業（業者委託）の他、松杭打ち、竹材組み立て、土嚢の積み上げ、河口周辺の作業（半日×百人余の会員ボランティア）を実施。これを機会に会の名称をビオトープの会とした。平成18年ビオトープ池20ｍ上流にゴミステーション（５ｍ幅）の設置。19年は町内会が倉見川河口（公園南詰め）に設置した9基の花筏（水生植物の栽培管理）の管理を引き受け、会員12人（77歳～62歳）は現在もビオトープ池周辺の清掃管理、ゴミスクリーンの維持管理（毎日のゴミ除去・１年間に数10ｔに及ぶ）、花筏9基の栽培管理、池東岸湖畔の清掃、会員有志の市民花壇30基余の半数を植栽管理、山王さん周辺活性化協議会事業への参加を行っている。

私どもは湖山池東岸の景観美化と池浄化を「生きがい」として日々頑張っている。これらの頑張りが平成21年度県土木施設愛護ボランティア団体活動優秀団体表彰の受賞につながったものとして老骨に鞭打って更に努力したいと思う。

今こそ、本気で湖山池の再生を

山王さん周辺活性化協議会　会長　竹内　房男

当地は歴史を遡ること、655年前に建立されたと云われる山王宮日吉神社「俗称、山王さん」と、日本一大きな池である湖山池「6.9平方キロ」の近隣に位置した風光明媚な地域である。豊かな歴史と文化を尊重し美しい湖山池と恵まれた自然を子孫に伝え大切に育んでいく事を目的に、山王さん周辺で暮らす住民が町内会や自治会活動の枠を越え、平成18年6月に「山王さん周辺活性化協議会」を発足させた。

会では、国の史跡に指定されている「布施古墳のそばに湖山池が一望できる400坪の公園づくり」や「案内板の設置」広い湖山池東岸のお花畑公園にサイクリングを楽しめる「無料自転車の設置」又湖山池に流入する河川に生活排水の悪臭を改善する為の「水質浄化のいかだ」の設置や管理、「歴史を学ぶ公開セミナーの開催」など多岐に渡る。そんな中で持ち上がったのが鳥取自動車道の開通を祝う、2009鳥取因幡の祭典イベントの企画募集である。かねてから構想を温めていた湖山池に浮かぶ青島は、一世を風扉した N-H-Kの人形劇「ひょっこり・ひょうたん島」に形がそっくりな事から、これを世に出そうと即座に応募し、739点の中で見事、会長賞を獲得した。これを契機に私達山王さん周辺活性化協議会のメンバーを母体に、地域の方や公民館、大学生や漁業関係者の方に呼びかけ、50名程で実行委員会を立ち上げ、09年の夏休み期間中に鳥取・因幡の祭典の中核イベントとして「鳥取版・びっくりひょうたん島」を実施した。

昨年の夏休み前半は連日雨が多くスタッフ一同、雨に翻弄されながら多くの参加者に元気をもらい、あっという間の45日間であった。人寄せパンダ方式のイベントと違い、全てが体験を通じての事業

の為安全面には相当神経を使ったが、6000人を超える参加者で盛り上がった事は大変喜ばしく思っている。今回のひょうたん島のイベントを通じて、湖山池や青島が子供達の集える場所になり、地域の人だけでなく広く県民共有の財産として多くの人達が体験を通じて再認識して頂けたら、名実共に日本一の湖山池として再生する日は決して遠くないと確信する。

折しも、昨年暮れ、山陰海岸ジオパークに湖山池も含まれた『世界ジオパーク』として申請され、地質遺産としての認定を期待したいと考える。私達の水質浄化の取り組みや、びっくりひょうたん島の活動を契機に住民と行政で湖山池の課題や問題点の解決を探るプロジェクトチームによる検討が進んでいるが、これも一過性の検討会に終わらぬ様、着実に歩んでほしいと願っている。

過去、数年振り返ってみても行政と、大学の学識経験者のみで湖山池の環境問題を論じてきた為、本来の主権者である住民不在の感が否めない。農業者、漁業者も含めた住民目線の情報の公開と共有により一向に進まない湖山池の環境改善を本気で取り組む時期である。環境問題が毎日の様に話題に上る現在、ＣＯ２や温暖化問題以前に解決しなければいけない湖山池のヒシやアオコ問題や隣接している14万羽もの養鶏場の悪臭問題や飛来してくる外来の渡り鳥による鳥インフルエンザの危険性の方が周辺住民には大きな不安と負担であろう。

私達の地道な地域活動が昭和・平成と幾多の年月もの間、実現しなかった住民目線の湖山池を甦らせる起爆剤になればと願ってやまない。

湖山池の水質について考えること

鳥取県環境教育学習アドバイザー　児島　良

湖山池は、遠い昔は海だったのですが、池の東側は千代川が中国山地から大量の砂を運び平野となり、北側は日本海の荒波によって砂が打ち寄せられ砂丘地となったためとり残された潟湖です。周囲を閉ざされ海と離れたとはいえ、池の水位は海とほとんど同じだったため淡水湖にはならずに、山から流れてくる真水と千代川を経由して湖山川から入ってくる海の水とが混じる汽水湖となり真水に棲む魚（コイ、フナ、タナゴなど）と海から上ってくる魚（セイゴ、ボラなど）、そして汽水域に棲む魚貝類（ハゼ、シジミ、テナガエビなど）と、魚貝類の種類が多く生態系豊かな池でした。

しかし、千代川と袋川の氾濫から市街地を守るため、千代川河口付近の付替え工事が行われ、湖山川は千代川と切り離されました。これが、湖山池の悲劇の始まりだったのです。
この工事により、湖山川は直接海と繋がることになり、濃い海水が直接湖山池に流れ込むようになり、湖山池は塩分濃度が高い汽水湖へと変貌する恐れがでてきました。そこで影響を受けたのが、湖山池から水をとっている農業でした。特に灌漑用水を池の水に頼る砂丘地の葉タバコ栽培に塩害被害がでるようになり、農業者と漁業者による協議が重ねられ、賀露にある湖山川の水門を利用して塩分濃度の調整をすることになりました。それは、湖山池の水位が高いときは水門を開き、海の水位が高いときは閉じる、すなわち排水するだけという操作で塩分濃度を下げ、農業用水確保のため淡水化を進めるというものでした。

このことにより、湖山池、湖山川、千代川、日本海の４者の絶妙なバランスで保っていた水質や汽水域の生態系に壊滅的な打撃を与えることになりました。湖山池にとって、生命線であった湖山川、すなわち息をする首を絞められたも同然のことだったのです。

また、折から湖山周辺は開発が進み人口が爆発的に増え、生活雑配水など湖山池が本来持つ浄化能力以上の汚染物質が流入するようになり、富栄養化とともに淡水化が進んだ結果、アオコが池を覆い悪臭を放つようになり、徐々

に人々に見放された池になってしまったのです。
湖山池のさらなる悲劇は、単なる「農業者と漁業者の水を巡る争い」というふうに問題を矮小化して市民に見られてきたことです。今から考えれば、結果的にそのことで問題解決を大幅に遅らせることになってしまったのです。
そもそも湖山池は、農業者や漁業者だけのものではありません。周辺住民をはじめ、全ての鳥取市民の財産でもあるのです。つまり、湖山池の水質をどうするのかという問題は、全市民の課題でもあったのです。
水質悪化には、県も市も積極的に対策をとってきました。市は、生活雑排水の流入をなくするよう公共下水道や集落排水の整備を進めてきました。県も専門家による会議や水質浄化実験を重ねて状況の打開を図りましたが、多少改善傾向は見られたものの自ら定めた水質基準には程遠い状況のままでした。

しかし、県が主催し、水質について何度も話し合った「湖山池水質水質浄化100人委員会」が出した結論で湖山池の未来が開けてきました。その会議には、行政や関係者のみならず一般市民も参加していますが、多くの市民からも要望がでていた「湖山池をもとの汽水湖に戻す」という方向性が決まったのです。これは、淡水化のまま浄化するという今までの方針を180度方向転換するものでした。
その方向性を受けて、平成19年度から21年度までの3年間、塩分導入実験を行なうことになりました。今まで決められていた塩分濃度を高い数値に変更することで、水門の開放時間を長くして水質改善を図るというものですが、ＣＯＤ，全チッソ、全リンなどの数値は改善しないどころか、なぜか悪化してしまったのです。その原因は、未だ解明されておりませんが、ただ漁業者は明らかに水質がよくなってきていると感じていました。
汽水湖の研究者で名高い元島根大学教授橋谷博先生の著書に「漁師は環境のインターフェイス」と書かれています。水質の良し悪しは、研究室で研究する学者より、現場で毎日水を見ている漁師の感覚のほうが正しいというのです。毎日毎日池の水を見ている漁業者には、いくら数値が悪くなっているといっても、まるで死んだようになっていた水が、水門が少し長く開いただけで水が生き返ったように感じられたのです。それは、漁獲物にも表れてきました。淡水化されていた近年は、あれほど美味しかった漁獲物の味が落ちるだけでなく、アオコの一種の異様な臭いによりとても市場に出荷できる代物ではありませんでしたが、昨年の秋には見違えるように元に戻ったのです。それとともに、淡水化で姿を消していたワカサギが獲れるようになり、わずかとはいえ出荷できるようになってきたのです。また驚くことに、シラウオが今までにないほどの記録的な大漁が続きました。
どうやら水質は数字で表われない何かがあるようです。そう考えると、県が定めた水質の指標はＣＯＤだとか全リン、全チッソ、ＰＨなどですが、化学的側面からしか水質を捉えていません。生息生物からの視点すなわち生物学からの視点が全く欠けていました。このことは大きな問題であり、湖山池問題の解決を遅らせていた最大の原因だと私は思っています。
人は水が透明だと「きれい」だといいます。確かに今の湖山池はあまりにも濁りすぎています。しかし、透明度や化学的数字がいいだけなら渓流やプールの水が一番でしょう。でも渓流やプールには湖山池の魚がすむことはできません。自然環境を考えるとき、見た目がきれいというような人間の感性の都合のいいように解釈しないで、その環境に住んでいる生物の視点で考えることがもっとも大事なことではないでしょうか。
今を生きる私たちは、風光明媚で生態系豊かな湖山池を後世に伝え残す義務があります。しかし、千代川から切り離された以上、もとの湖山池の水質に戻ることはできません。従って、「新しい湖山池の姿はどうであるべきか」という課題を、行政や漁業者、農業者だけでなく、当事者の一人である市民の皆さんも一緒になって話し合う必要があるのです。